



一人ではどうにもできない貧困、
だから一緒にかえていく。

We walk together toward the world without poverty.

アクセス

活動報告書

2017-2018

アクセスとは

「10人中2人の子どもが、小学校を卒業できない」

そんなフィリピンで、私たちは、「子どもに教育、女性に仕事」を提供する国際協力 NGO です。

1988年に京都で設立されて以来、フィリピンの人々とともに活動してきました。

フィリピンの貧しい人々も、日本で暮らす人々も、ともに地球市民として

「貧困をはじめとする社会的な課題を、一人ひとりが主体となって解決し、

より良い社会を創っていく」ことをめざしています。

Aspiring Citizens for Community Empowerment with Sunny Smile

Contents

目次

| 5分で知るアクセスとフィリピン

アクセスのミッション／フィリピン事業概要	3
アクセスの組織図	4
アクセスのあゆみ 1988-2018	5
統計から見る、フィリピンの現状	6
2017年度 活動ハイライト	7

| 2017年度事業報告

アクセス総評	10
フィリピン事業報告	12
日本事業報告	16

| 子どもたちの声／サポーターの声

| 2017年度決算報告

| 私たちのめざすもの

「誰も犠牲にしない豊かな社会」	24
私たちの活動の柱	25
エンパワメントと組織化	26
役員・スタッフ・ボランティア	28
活動を支えている皆様	30

活動を支えてくださっている皆さまへ



アクセス事務局長
野田 沙良

アクセスは今年、おかげさまで30回目の誕生日を迎えることができました！
困難の中でも、踏み張りつづけてくれた頼もしいスタッフ、ボランティアの皆さん、ご協力
いただいていた皆さんに本当に感謝しています。「貧困を博物館の中のどこかに」
と話す元現地スタッフの Tito さんの言葉に胸に、皆さんとともに次の10年へと
踏み出します。

アクセス事務局長 野田 沙良

アクセスのミッション

アクセスの

3つのミッション（使命）

どれか1つ欠けても

貧困をなくすことはできない、

と考えています

*アクセスのミッションの詳細は、P24～27をご覧ください。

貧困の痛みを
和らげる

教育・生計支援
人権擁護

貧困の原因を
明らかにしながら
貧困をなくそう
とする人を
増やす

協力できる
場を提供する

フィリピン事業概要



■ピナツボ

1991年に起こったピナツボ火山噴火の被災地区。特に土石流堆積の被害が大きかったバンバンガ州ポーラック町ミトラで、教育を中心としたコミュニティ復興事業を進めています。



■ペレーズ

小さな島の一角にある、貧しい農漁村地区ペレーズ。農業と漁業で生計を立てる人々が大半を占めています。ここでは1999年より、教育支援、フェアトレード、青年育成、マイクロファイナンスなどの活動を行っています。



■パヤタス

マニラ首都圏から出るゴミの集積所の1つであるパヤタスで、1994年に幼稚園を建設。2013年より、その運営支援を行っています。



■アベロクルス

2015年度末で活動を終了しました。

■トンド

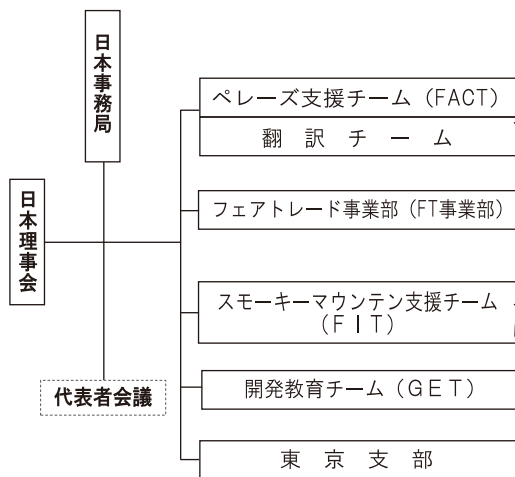
マニラでも名の知れた貧困地区トンド。首都圏から出るゴミの集積場であるスモーキーマウンテンは、このトンド地区内にあります。ここでの活動は2005年から始まり、現在は地区内の若者や子どもたちを対象とした教育支援事業を行っています。



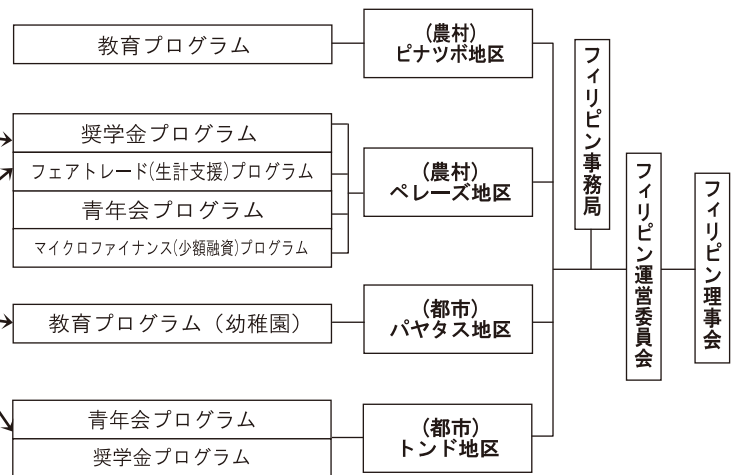
アクセスの組織図

2018 年 10 月時点

アクセス・日本



アクセス・フィリピン



* アクセス・日本とアクセス・フィリピンは、それぞれの国に理事会をもち、それぞれ法人格を持っていますが、実質的には2つで1つの国際協力NGOです。

2009 年度からは国際理事会を設置し、単一のNGOとして意思決定を行っています。

* ピナツボ支援チーム (PEACE) と、カフェイベント実行委員会は、2018 年 3 月より、活動を休止しています。

ボランティアが 活躍する アクセス



アクセスで定期的に活動するボランティアは、約 40 人！

そのほとんどが、「チーム」に所属しています。

チームメンバーは、アクセスの活動目的に沿って、

自分たちの活動を一から話し合い、計画し、実行します。

事務局は必要な時だけ、チームの活動をサポートします。

メンバーの主体性を重んじるからこそ生まれる

活気が、アクセスの魅力の1つかもしれません。

* 各チームの活動報告は、P16～19 に掲載しています。所属スタッフの一覧は P29 をご覧ください。

* ボランティア情報メールへの登録者は 469 人です。

【わたしたちがロゴに込めた想い】

「みんなで考え、話し合うことを通じて、活動を創っていく。」ふきだしは、そんなアクセスのスタイルを表現しています。

「活動を通じて支えあう関係をつくりだし、その中で笑顔をつくりだしていきたい。」

そんな願いを込めて、ふきだしがにっこり笑っているようなデザインになりました。

designed by musubi design



アクセスのあゆみ

1988 - 2018



「京都アジア文化交流センター」として創設 留学生寮・シェルターの運営	1988	
滞日外国人の人権侵害問題への取り組み	1989	
	1990	フィリピン・マニラに現地事務所を開設
滞日外国人緊急医療問題への取り組み	1991	ピナツボ火山噴火
	1992	
ダバオ市から劇団K A L I W A Tを招き日本公演	1993	
劇団K A L I W A T日本公演	1994	ケソン市パヤタスにて就学前教育施設を建設・運営
	1995	
	1996	
	1997	パサイ市アペロクルス地区でプロジェクト開始 フィリピン現地事務所を現地法人に改組
「アジア文化交流センター」と改称	1998	ピナツボ地区・実験農場をバンバンガ州ポーラック町に移転
	1999	ケソン州アラバット島ペレーズ地区でプロジェクト開始
特定非営利活動法人に改組	2000	ペレーズ地区でフェアトレード事業開始
大蔵流狂言師茂山七五三氏によるチャリティ狂言公演 フェアトレード事業部発足	2001	
G E T（開発教育チーム）発足	2002	
A C T（アペロクルス支援チーム）発足	2003	
B Y P S（ペレーズ家庭養豚奨学プログラム支援チーム）発足	2004	ペレーズ青年会設立
F A C E（ペレーズ支援チーム）発足	2005	マニラ市トンド地区スモーキーマウンテンで事業開始
「アクセスー共生社会をめざす地球市民の会」と改称	2006	スモーキーマウンテン地区で青年会設立
F I T（スモーキーマウンテン支援チーム）発足	2007	ピナツボ地区で就学前教育施設の運営開始
	2008	ピナツボ地区で小学校校舎・井戸を建設
	2009	ペレーズ地区で奨学金プログラム開始 ピナツボ地区で小学校校舎増築
L O L A（ロラ支援チーム）発足	2010	ペレーズ地区でマイクロファイナンス事業開始 ピナツボ地区で子どもに優しいコミュニティづくり事業開始 ピナツボ地区でカラバオ（水牛）供給プログラム開始
P E A C E（ピナツボ支援チーム）発足	2011	
パートナーシップ大賞グランプリ／第五回かめのり賞 受賞	2012	
A C TチームとF A C Eチームが合併し、F A C Tチームに	2013	ケソン市パヤタスにて、就学前教育施設の運営を再開
	2014	ピナツボ地区に幼稚園・社会教育センター建設 立ち退きに伴い、スモーキーマウンテン地区事業終了
社会人翻訳チーム、カフェイベント実行委員会発足	2015	ピナツボ地区で子どもに優しいコミュニティづくり事業開始 トンド地区で奨学金プログラム開始
	2016	
認定N P O法人に認定	2017	
社会貢献者賞／ヒューマンかざぐるま賞 受賞	2018	創立30周年
創立30周年		

1988 - 2018

統計から見る、 フィリピンの現状

4人に1人が貧困層

経済成長率の高さが注目されるフィリピンですが、一人当たりGDP（国内総生産※¹）は日本の約 5 分の 1。日本をはじめとする「北」の国との格差は、縮まっていません。

フィリピン政府は、「5 人家族が最低限必要とする生活費は月額 9,140 ペソ（日本円で約 20,108 円／1 日 1 人あたり 134 円）」としており、この基準を下回る貧困層は、2015 年で 21.6%（データ 1）と発表しています。世界銀行によると、2014 年に 1 日 1.9 ドル以下で暮らす人々は 13.1%（データ 2）とも言われています。国の経済が成長する一方で、その豊かさは底辺まで行き届いていません。

※1：国内で、1 年間に生みだされた生産物やサービスの金額の総和のこと

子どもの就学状況

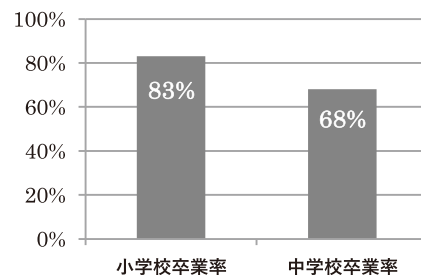
フィリピンで小学校を卒業できるのは 2015 年で 83%にすぎません。2005 年の 70%と比べると改善はしていますが、17%もの子どもが小学校を卒業できないのです。（データ 3）

小学校教育に授業料はかかりませんが、学校の設備や教材などが不足していたり、制服や学用品が買えない、家計を支えるために働かなければならないといった理由で、中退者が後を絶ちません。

10 人に 2 人が

小学校を卒業できない、フィリピン。

その現状を、統計データを見ながら紹介します。



女性が活躍する国というイメージの一方で

フィリピンの管理職における女性の比率は世界でも 5 番目に高いと言われ（データ 4）、「女性が活躍する国」というイメージがあるかもしれません。しかし、2015 年の雇用率※²は、男性 77.3%、女性 50.1%と、女性の方が 27.2 ポイントも下回っています（データ 5）。

その背景には、貧困層において今も根強く残る、性的役割分業の意識があります。特に農漁村では、「男性は農業や漁業で収入を稼ぎ、女性は家事・育児をする」ことが一般的で、職業の選択肢が限られていることもあり、女性が仕事につくことは簡単ではありません。貧困層の女性ほど経済的に男性に依存せざるを得ず、子どもの暮らしを守るため、家庭でも地域でも、自分の意見や考えを押し殺して生きる女性が少なくありません。

※2：15 歳以上の働くことができる人々のうち、雇用されている人の割合

アクセスはこうした現状に対し、
「子どもに教育」、「女性に仕事」
を提供することで、女性や子どもの
エンパワメントをすすめています。

【データ出典】

- データ 1 : "Basic 2017 Statistics" Asia Development Bank
- データ 2 : "Basic 2017 Statistics" Asia Development Bank
- データ 3 : <https://wenr.wes.org/2018/03/education-in-the-philippines>
- データ 4 : "The Gender Gap Report 2016" World Economic Forum
- データ 5 : "Key Indicators for Asia and the Pacific 2016" Asian Development Bank



* エンパワメントの具体的な内容については、P25-27 をご覧ください。



写真：保護者が調理した、栄養バランスのとれた給食を楽しむ子どもたち



子どもの教育

10人中2人が小学校を卒業できないフィリピンで、

576人

の子どもたちを支援しました

子どもの教育支援 2017年度の3大ニュース

- 1 52人が小学校を卒業
- 2 47,516食の給食を提供
- 3 ジェンダーをテーマとした5回連続のセミナー・ワークショップを実施

[教育支援プログラム 参加者数]

奨学金プログラム	212人
小学校運営支援	174人
中退者の卒業資格取得支援	5人

幼稚園運営	53人
若者の非行防止・育成	42人

* 詳細はP12へ

2017年度活動ハイライト



女性・若者の仕事

子どもの幸せを願う母親や、働きたい若者たちへの仕事の提供

21人に

仕事の機会を提供

写真：
慣れた手つきで、ココナツ殻を磨いてフェアトレード商品を仕上げる、ペレーズの女性。

フェアトレード事業 2017年度の3大ニュース

- 1 マーケティング担当スタッフをフィリピンで採用し、フィリピン国内での営業開始
- 2 119万円の売り上げ（前年度の75%に止まる）
- 3 カード生産者には、平均月2,500ペソの収入を提供（米62キロが買える金額）

【仕事の機会の提供 参加者数】 フェアトレード 6人 マイクロファイナンス 15人 *詳細はP14へ

若者の非行防止と育成

文化活動や、清掃・植林ボランティアなどを通じ、地域のために活動することをいとわない人材を育てる青年会を組織

42人が活動に参加

*詳細はP13へ

写真：
マニラで開催した若者育成ワークショップで、発表する参加者



2017年度活動ハイライト

出 会 い

スタディツアー参加 73人

写真：フィリピンの子供と交流する日本の大学生



イベント参加 39人

写真：ボランティアが中心となって運営したイベントの参加者の皆さんと

参 加

900人以上が活動に参加

中古の本・CD・DVD・ゲームの寄付	97件
書き損じハガキ	81件
会員・サポーター	728口
ボランティアスタッフ	約40人

(P29のスタッフ一覧、P31の協力団体リストもご参照ください。)



協 力 ・ 連 携

38の企業・学校・非営利団体などとの連携

学校	6校
企業	14社
非営利団体・グループ	18団体・グループ



海外プロジェクトの協働、資金・物品の寄付、募金箱の設置、フェアトレード商品の販売

物品の収集、海外研修の受け入れ などの形でご協力いただきました。

アクセス総評



・・・・・・・・ 2017年度 アクセス7つの成果と課題 ・・・・・・・・

- 1 教育支援プログラム 活動の質が向上し、「子どもに優しいコミュニティづくり」も更なる深化
- 2 生計支援プログラム 日本での売り上げ減少／フィリピン国内での販路拡大が一步前進
企業・団体オリジナルデザインのグリーティングカード開発の可能性
- 3 物資の寄付件数が増加！
- 4 主催イベントの回数が3回、参加者39名に減少
- 5 フィリピン・スタディツアーは、例年並みの参加者数で推移
- 6 スタッフの業務能力アップ！ 労働条件の改善を求める声も
- 7 一人のできる仕事も、あえて複数人で共有することで、職場環境が改善

700名を超える協力者の皆さまから支えられ、2017年度はフィリピンの貧しい子どもや若者など576名に教育のチャンス、21名の女性や若者に働くチャンスを提供することができました。

子どもたちへの教育面でのサポートは、年々活動の質を高めることができています。単に不足している学用品や教育費を提供するにとどまらず、さまざまな理由で就学を続けられない（または、続けられなくなりそうな）子どもたちに対して、何度も会って話をしたり、地域の人々とともに子どもたちやその家族を見守り、支える体制づくりができるようになってきました。

女性や若者に働くチャンスを提供する活動については、フ

ェアトレード事業に注力し、マイクロファイナンス事業は小規模に継続しています。特に2017年度は、フィリピンでも日本でも、販路の拡大のためにさまざまな工夫を凝らした一年でした。

各事業の成果や課題についてはP12～の事業報告に掲載しておりますので、ここではその活動を支える組織基盤面での課題と今後の方針をご報告します。

「選択と集中」で、困難をのりこえろと決意

2018 年度に 30 周年を迎える私たちは、次世代リーダーへの交代をどう進めていくかという課題と、慢性的な赤字構造をどう乗り越えていくかという、2つの大きな課題に直面しています。

ここ 7 年、日本でもフィリピンでも、ほぼ毎年職員が退職しています。それぞれ退職理由は異なりますが、待遇の問題が一定程度は影響していると考えています。高い意欲をもって働いてくれている職員に対して、十分な給与を支払いたいと思うものの、では財源はどうするのか、という問題が積みまってきました。

退職が続くため、次世代を担う中堅職員が育たない。そのために世代交代の見通しが立たず、組織の展望を描くことが難しく、組織としての活力も十分に発揮できない。そんな状態が続いてきたように思います。

2017 年度は、そうした複数の問題が絡み合った苦しい現状を、いろいろな人々の力を借りて解きほぐし、解決策を探った一年でした。以下に、アクセスの抱えてきた長年の課題と、その解決に向けた 2018 年度の方針をまとめました。

どうか私たちの 2018 年度のチャレンジを、見守っててください！

長年の課題

1. 毎年、職員が退職していく
2. 特にフィリピンでは、次世代を担ってくれるような中堅職員が不足
3. スキルを身に付けたり、モチベーションを向上させるような研修の機会の不足
4. 低賃金

赤字になりやすい財務構造（労働条件の改善に取り組めない）



2017 年度後半、コンサルティング付き経営セミナーを受講したり、NPO の経営経験のある人々に相談にのっていただきながら、事務局・理事会で何度か話し合いを重ねて、以下のような方針を決定しました。

2018 年度の方針

- ✓ 優先順位の低い業務を止め、優先順位の高いものに時間をかける
- ✓ スタッフの退職に歯止めをかけるため、フィリピン側の賃金体系を見直す
- ✓ 中堅職員・理事の育成研修として、フィリピン人スタッフのための日本スタディツアーを実施する
- ✓ 30 周年を期に、日比の若手理事・職員で話し合っ団体のビジョンを見直す
- ✓ 新しいビジョンにそって、事業・財務構造を見直す



株式会社ドロキア・オラシイタ × アクセス

2014 年より、「焼きたてチーズタルト専門店 PABLO」で知られるドロキア・オラシイタにご協力いただき、パヤタス地区とトンド地区、子どもたちを対象とした、給食と教育支援を継続しています。

「PABLO 出店のために訪れたフィリピンで、チーズタルトを買える富裕層の裏に、食事もままならない貧困層が沢山いるのだと実感しました。」と話す、社長の寄本将光さん。2017 年度も、パヤタス地区・トンド地区の子どもたちの給食と教育支援にご協力いただきました。



奨学金の提供
幼稚園運営
青年会

奨学金プログラム

ペレーズ地区／トンド地区



212 人の 小学校就学を支援

【事業地】

- ケソン州アラバット島ペレーズ
- マニラ首都圏マニラ市トンド

52 人が小学校を卒業

2018 年 3 月には、アクセスの奨学生 52 人が小学校を卒業することができました。奨学金がなければ、小学校すら卒業できなかったかもしれない子どもたちの姿を、親たちはうれしそうに見守っていました。

フィリピンでは 9 割以上の子どもたちが小学校に入学しますが、入学した子どもの 2 割は、経済的な理由などで退学してしまいます。自信を持てないまま、苦勞の多い人生を歩むことになる子どもを一人でも減らすため、2017 年度もたくさんの方にご協力いただきました。

子どもの権利とジェンダーセミナー

アクセスの奨学金プログラムでは、制服・文房具といった通学に必要なものを現物で提供するほか、保護者に調理をお願いして給食を提供したり、地域の若者たちの協力を得て補習授業を実施したりしています。保護者や奨学生を対象としたセミナーも、重要な活動の一部です。

継続して行ってきた子どもの権利セミナーは、回を重ねるごとに地域の人々の意識を変えていっていることを実感しています。子どもの権利セミナーを 7 年間続けてきたペレーズ地区では、2017 年度はジェンダーについてのセミナーを初めて実施しました。「女性の社会進出度は世界トップレベル」と言われるフィリピンですが、農村コミュニティではまだまだ男女の性別役割が根強く残っており、女性に対する無視・軽視・暴力につながっています。子どもの健やかな成長のためには、女性の権利が

守られている必要があると考え、5 回のセミナーを実施しました。アンケートでは、参加者の 2 割にあたる 57 名が、セミナーでの学びを既に家庭や地域で実践していると回答しています。

セミナーのおかげもあって、子どもの権利については「近所の子が学校に行っていない」といった場面で、地域の人たちが相談し、問題解決に向けて行動するということが少しずつ行われるようになっていきます。今後は、女性の権利についても、同じようにセミナーでの学びを日常に生かしていってもらうことをめざします。

止められなかった 7 人の中退

トンド地区では、35 人の奨学生のうち 7 人が小学校を卒業できました。しかし、別の 7 人は、病気・保護者による育児放棄・働いたためなどの理由で小学校を中退してしまいました。海や山からある程度の食料を調達できる農漁村に比べ、都市スラムであるトンド地区では生活費が高くつきます。食べる物にも困っているような家庭は、子どもも働かなければ生き延びることができません。

そうした家庭の子どもたちにこそ、就学して貧困から抜け出すきっかけを手にしてほしいと願っています。しかし、現在の奨学金プログラムの枠組みでは、食料を定期的に支援したり、治療費を支援することができません。最も厳しい状況に置かれている子どもたちに対して、私たちはどう関わっていくのか。問題の解決につながる新たな支援策を考えていかなければなりません。



奨学生の Jくんから、サポーターに届いたお誕生日メッセージを紹介します。

お誕生日おめでとうございます！あなたが僕のことを覚えていてくれたらいいな、と願いつつ書いています。
僕はここで元気に、幸せに暮らしています。あなたはいかがお過ごしですか？あな

たがお誕生日の日に、幸せに過ごせているといいなと願っています。

いつかあなたとお会いして、しっかり抱き合える日がくることを想像すると、ワクワクします。一生懸命、勉強しますね。

53 人の子どもたちを受け入れ

【事業地】

- ピナツボ火山被災地
パンパンガ州ポーラック町
- ゴミ捨て場周辺コミュニティ
マニラ首都圏ケソン市パヤタス地区

アクセスでは、上記2地区において2つの幼稚園を運営し、4歳児への就学前教育を行っています。

週5日、10カ月間にわたって、言語、認識、運動、自助、社会性・情緒の5つの領域での発達をうながす授業を行いました。授業日には、近畿ろうきんや株式会社ドロキア・オラシイタからの支援で、栄養バランスのとれた給食を提供しました。



ピナツボ地区の幼稚園卒園式の様子

保護者の方々に対しては、「幼児期のケアと成長」、「子どもの権利」「子どもへの接し方」「障害をもつ子どもへの接し方」といったテーマで、セミナーを開催。子どもたちが心身ともに健やかに成長できるよう、保護者の考え方やふるまい方をふりかえり、見直してもらうよい機会となりました。（パヤタス地区5回／ピナツボ地区8回 開催）

青少年の育成

ペレーズ地区／トンド地区

フィリピンでは、青少年の非行（喫煙、飲酒、薬物使用など）は深刻な問題となっています。アクセスでは、13歳以上の青少年が参加する青年会を2地区で組織し、下記のような活動を行うことで、地域のために協力して行動できる若者の育成に取り組みました。

- ✓ 社会問題についての学習会
- ✓ 地域の課題や人権問題を表現する演劇、ダンス等の創作・練習
- ✓ 文化発表会への参加、開催
- ✓ 貧困について学び考える、サマーキャンプ
- ✓ マニラを訪問するスタディツアー（ペレーズ地区のみ）
- ✓ 地域貢献活動（植林、清掃、奨学生の補習授業での指導役など）



ペレーズ地区とトンド地区の青年会メンバーが参加した、演劇ワークショップ

2017年度、首都マニラの中でも最大の貧困地区といわれるトンド地区で組織している青年会では、28人がメンバー登録し、うち15名が中心となって活動を行いました。農漁村ペレーズ地区では、14人が活動に参加しました。

社会教育

ピナツボ火山被災地

ピナツボ地区では、フィリピン政府教育省と連携し、アクセスが建設した社会教育センターにて、ALS（Alternative Learning System）の補習授業を行いました。これは、小学校や中学校を中退した人たちのための制度で、週1回の授業を受けて試験に合格すると、卒業資格を得られるというものです。アクセスからは、学用品や試験の時の交通費を5名に提供。2017年度は、4名が中学校卒業資格を取得することができました。

（写真：ALSの補習授業を受講する女性と、先生）



女性と若者の仕事づくり

フェアトレード
マイクロファイナンス

Livelihood

フェアトレード事業

ペレーズ地区



上：真剣な表情でカード作りに取り組む若者たち。幼い子どものために働く人、体が弱く働けずいた人などがある。
右：1枚1枚手作りされた、フェアトレードのクリスマスカード。
右下：ココナツの殻を丁寧にみがいて作られた、フェアトレードのペンダント。

マバヤバ
Mapayapa 2名

ココナツ殻雑貨生産グループ

パンガラ
Pangrap 4名

グリーティングカード生産グループ

年間売上 119万円

「子どもにお腹いっぱい食べさせてあげたい」「自分で稼いで自立したい」そんな夢を持つお母さんたちや若者を応援しようと、2017年度もフェアトレード商品の生産と販売に取り組みました。1人でも多くの人に働くチャンスを提供し、努力すれば夢がかなえられる地域づくりに貢献することをめざしています。「子どもを残して都市に出稼ぎに行っていたころは本当に辛かった。今は、地元で子どものそばで暮らし、働けることが本当にうれしい。」と涙ながらに話すお母さんもいます。

2017年度は、日本での販売量が伸び悩んだことから、10月以降はほとんど注文をすることができませんでした。生産者が受け取る年間の総収入は増やすことができませんでしたが、安定した収入を提供することにまでは至りませんでした。そのため、生産者の何人かが島の外に働きにでてしまうという、とても悔しい結果となりました。

その一方で、フィリピン事務局ではマーケティングを担当する職員を採用し、欧米やフィリピン国内での販路を探りました。その結果、欧米への販路拡大は難しいものの、ココナツ雑貨に関しては、フィリピン国内での販路拡大の可能性が見えてきました。2018年度に入ってから、マニラ空港内の土産物店などでの販売が始まっています。

生産現場では、スタッフと生産者が定期的にミーティングを持ち、技術面でも個人的なことでも、困っていることをなんでも話し合えるようにしました。そのおかげで、数か月先を見通した生産計画が立てられるようになりました。また、生産者が材料の在庫数を定期的に記録するようになり、生産の遅れを防いだり、材料の節約にもつながりました。このように、小さなことでも1つ1つ課題が改善されていっていることは、うれしい変化です。

マイクロファイナンス事業

ペレーズ地区

商売を通じて生活を改善したいと希望する女性に少額を融資するマイクロファイナンス事業では、15人への融資を継続しました。借入金で雑貨店を営んだり、行商や炭焼き、養豚などを行い、毎週少しずつ返済します。

2010年に開始して以来、返済率100%が続いていた本事業ですが、2014年度に入ってから返済率が低下。2016年度以降は規模を最小限に縮小して実施しています。



アクセスの未来について相談にのってくれた若手ボランティア・理事の皆さん

30周年と、これからの10年

アクセス日本 事務局長 野田沙良

2018年10月で、アクセスは創立30周年です。「今年で30周年なんです」と話すと、必ず「すごいですね!」と驚かれます。確かに、30年間活動を継続するというのは、簡単なことではありませんでした。財務面でも組織面でも、さまざまな危機がありました。私自身、「もう辞めたい!逃げたい!」と思ったことが、実は何度かありました。でもその度に、皆さんに物心ともに支えていただき、なんとか危機を乗り越えることができました。こんなにも多くの人に支えていただける組織の一員であることを、私はとても誇りに思っています。

30代に入るアクセスは、これからどんな道を、どんな風に歩いていくのでしょうか? 創設者の一人で現理事長の新開はもう70代後半。2代目を率いてきた森脇は50代後半。3代目として期待される私(30代後半)が、未来のアクセスのカタチを描かなければならない時期にきています。

「でも、どうやって?」

25周年記念フォーラムで「10年後のビジョン」の一端を皆さんにご紹介したものの、実は私は、未来のイメージをうまく描くことができず、もがいてきたのでした。

話し合いの場を持つようにも、誰と何をどこから話し始めればいいのか、良いアイデアが浮かびません。手探りでやってみるもののしっくりこず。誰に何を相談したらいいのかもわからず、暗中模索の日々が続きました。

私は何とかして突破口を見つけようと、ある時から、若手理

事や古くからのサポーターさんと食事に行ったり、NPOコンサルタントの方に相談にのってもらったりするようになりました。何を相談したらいいかはわからないけど、とにかく「今後のアクセスについて悩んで…」と、率直に話すようにしたのです。すると、「そっか、そしたら一緒に考えてこか!」と言ってくれる人が何人か見つかりました。そして、フィリピンでの思い出話の合間に、さまざまなアイデアが生まれ、あの人にも力を借りよう、あの子も誘ってみよう…と、未来と一緒に考えるなかまが増えていきました。手探りするうちにそんな輪が広がり、「なんとかなりそう!」と思えるようになったことが、2017年度の大きな成果でした。

2018-2019年は、そうした若手とともに4回連続のワークショップを実施して、10年後のビジョン(未来のイメージと目標)を策定することになりました。2019年11月にはフィリピンの若手スタッフ2名を日本に招き、日比の若手合同で、アクセスの10年後のビジョンを描くことにしたのです。

30年の歴史の中で培ってきたアクセスの良さを継承しながら、時代やニーズの変化も踏まえた時、アクセスはどんな姿をめざすべきなのか。1年間かけて、じっくり話し合っていくつもりです。

皆さまにも、折に触れてその話し合いの経過をお伝えし、ご意見をいただくことができればと考えています。



フェアトレード事業部

FT 事業部/Fair Trade Division

一人でも多くの人に商品を手に取ってもらい、生産者の収入アップにつなげることが、フェアトレード事業部の大きな任務です。2017年度は、大手小売店（阪急、大垣書店、高島屋）、フェアトレードショップなどの小規模小売店でお取り扱いいただいたほか、事業部のボランティアスタッフが教会、学園祭などに出かけて販売。また、サポーターや協力者の方々にも、職場や学校などで販売していただきました。事務局では、寄付つきカードセットの販売を初めて企画しました。

さまざまな工夫をかさねた一年でしたが、売上総額は119万円（カード90万円、ココナツ雑貨29万円）と、前年度比75%でした。ココナツ雑貨の販路・販売規模が縮小したためです。2018年度は、さらなる工夫が求められています。

ノベルティ商品の開発も

9月に大阪ギフトショーという展示会に出展したところ、京都駅前のホテル「ハトヤ瑞宝閣」と、子ども服ブランド「ブランシェス」が、オリジナルカード製作に関心を示してくださいました。2018年度からは、ノベルティとしてお使いいただくオリジナルカード開発にも力をいれていきます。

9点の新作カードが誕生

後半期には、京都精華大学の学生さんやボランティアさんから、20点以上の新作カードのデザインが提案されました。それらをもとに、現地で何度か試作を繰り返したのち、アンケートで人気のあった9点を2018年度の商品ラインナップに追加しました。

2017年度は職員1名、インターン2名、ボランティア6名で定期的にミーティングを実施し、営業・デザイン開発・バザー出展などに分担して取り組みました。また、検品に定期的に参加してくださるボランティアさんが増え、2017年度は4,818枚カードの検品を行うことができました。



2匹の猫が寄り添う封筒から、中のカードを引き抜くと、夜空が現れる、新作クリスマスカード。

フェアトレードでできること

1. ダイレクトに現金収入につながる

貧困に苦しむ人は働かなくても仕事がない、がんばって働いても低収入……ということが大きな悩み。フェアトレードで仕事の機会を増やしたり、公正な価格を支払うことで、その悩みを緩和できます。

2. 生産者の自立につながる

フェアトレードでは商品を売買って買い支えるだけでなく、生産技術向上や組織の運営能力向上のための支援も行います。将来的にはNGOなどに頼らずとも継続的に生産・取引できるようになることをめざします。

3. 生産者の自信・自尊心につながる

お金や物を無償で与える支援ではないため、生産者は自分で働いて稼ぐ喜びや自信を得ることができます。また、「支援される側」と「支援する側」ではなく、ビジネスパートナーとして対等な関係を築くことができます。

4. 貧しい地域の人々に夢を

いきいき働く生産者の姿を見て、まわりの大人や子どもたちが「自分も頑張れば貧困から抜け出せるかも」と夢を持つきっかけになる可能性があります。

5. 貧困問題に関心を持ってもらうきっかけに

「かわいい!」「おいしそう!」という視点から、世界の貧困問題やフェアトレードに関心を持ってもらい、何気なく購入している商品の背景にある生産者の厳しい現実気づいてもらうことができます。

【アクセスのフェアトレード事業部は・・・】

- ① 困地区における雇用の創出と現金収入の確保
- ② 生産者団体へのエンパワメント
- ③ 貧困問題を日本の市民に伝え、解決手段としてフェアトレードを推進するという3点を目的として活動を行っています。

開発教育チーム

GET / Global Education Team

伝えるための「工夫」と「交流」

GET は 2017 年度、3つの中学・高校で訪問授業をさせていただきました。以前からご縁のある学校から、「ぜひ来年も」と声をかけていただいていることをうれしく思います。

2017 年度は授業の実施時期が秋冬に集中したため、準備時間の確保に苦労しました。それでも、新しいワークショップやアイスブレイキング（緊張をほぐすワーク）を開発することができ、視覚的にもよりわかりやすいプレゼンテーションを準備することができたので、以前よりも生徒さんたちに理解してもらいやすくなったと感じています。

2018 年 1 月には、スモーキーマウンテン支援チーム（FIT）と合同での茶話会を開催しました。普段、あまり接することのないほかのチームのメンバーとの交流を通じて、都市スラムの最新の状況を知ることができ、今後の授業に生かせる情報を得られたのは、収穫でした。

私たちの活動は、日本の子どもたちや中高生にフィリピンの現状を伝えるという、地道な種まき活動です。その種が、いつどんな風に芽生え花開くのか、といった結果がわかることはめ



スタディツアー参加後に新たにメンバーになってくれたスタッフも、訪問授業デビュー！

ったにありません。成果が見えづらい中、モチベーションをうまく維持していくことが一つの課題となっています。

最新情報は Facebook [GET-Global Education Team](#) で検索

開発教育チーム (GET) 貧困の現状や原因について、教育現場での訪問授業を中心に、様々な形での「伝える」活動を行っています。スタディツアーでフィリピンを訪問した学生が中心となり、実際に目で見て肌で感じたフィリピンのリアルな現状を伝える事を重視。貧困問題の解決に向けて行動を起こす人を一人でも多く増やすことが目標です。



8月に実施した現地訪問活動にて

スモーキーマウンテン支援チーム

FIT / Fine Interaction Team at Smoky Mountain

「遣^{けん}ト^しン使」を原動力にして

2017 年度は、フィリピンのプロジェクト地を訪問し、住民の方々と現地スタッフと交流する「遣^{けん}ト^しン使」（トンド地区などにスタッフを派遣する、現地訪問活動）のほか、サポーター募集のためのリーフレット作成、活動資金集めを目的としたフリーマーケット出店（3回）、写真展、茶話会と、さまざまな活動を展開することができました。

8月に実施した「遣^{けん}ト^しン使」は、やはりトンド地区の人々と

顔の見える関係を築くという意味で、とても重要な活動となりました。参加したメンバーは、「現地の人たちとともに暮らしを向上していきたい」という意欲が高まり、それまで以上に日本での活動に熱心に取り組むようになりました。

課題は、ミーティングの出席者をどう増やしていくかということです。就職活動やインターンシップ、アルバイト、実習、研究などで多忙な中、何とかして多くのメンバーが定期的に集まれるようにと、試行錯誤を続けています。

スモーキーマウンテン支援チーム (FIT) マニラのゴミ捨て場周辺スラムで暮らす人々と協力して、共に生活を向上させていくことを目的に活動しています。メンバー一人一人が現地への理解と関係を深めて活動することを大切に、メンバー同士でも刺激し合いながら楽しく活動しています。

東京支部 Tokyo Branch MAG KASAMA

社会人・学生が協力し、関東で活動

「人から人へ、想いが循環する社会の実現」をきっかけ、東京支部は 2017 年度の活動に取り組みました。就職を機に関西から関東へ引っ越した会員・スタッフや、関東在住のスタディツアー参加者からなる東京支部は、東京で開催される国際協力イベントへの出展などを通じて、アクセスの協力者の輪を広げることを目標に活動しています。

2017 年度は、9 月の「グローバルフェスタ」と 10 月の「アジアカンファレンス」に出展し、フィリピンの現状やアクセスの活動について伝えながら、フェアトレード商品の販売を行いました。販売後は、売れた商品の傾向分析も行い、次年度の販売に生かせるヒントを探りました。

最も力を入れたのはワークショップの開発です。何度もミーティングを重ね、充実したワークショップを完成させることができました。しかし、実際にワークショップを実践させていた



グローバルフェスタのブースにて

多く学校探しに苦戦。訪問先が見つからないまま、年度末を迎えることになり、残念に思っています。

2018 年度は、転職などでメンバーが減り、活動に参加できる人数が減りました。できることは限られてしまっていますが、関東にいるアクセス関係者が集える場として、活動を続けていきます。

ピナツボ支援チーム PEACE

Pinatubo Educational and Agricultural Community Empowerment

ピナツボ地区の子どもたちに教育を

2010 年に発足した PEACE チームは、ピナツボ火山被災地であるパンパンガ州ボーラック町ミトラ地区でアクセスが運営する幼稚園などを日本から支えています。スタディツアーでピナツボ地区を訪れたことのあるメンバーが「あの地域の子どもたちを少しでも応援したい」という思いで活動しています。

2017 年度は、幼稚園などの運営費のうち 5 万円を集めることを目標に、3 回のフリーマーケットに出店し、売上金を現地への支援にすることを計画していました。しかし、メンバー数がそれほど多くないこと、各メンバーが忙しくなかなか予定が合わなかったことにより、実際にフリーマーケット出店ができたのは 9 月の 1 回だけとなりました。

出店したのは、伏見ふれあいプラザ 2018 というイベントの一角で開催された「エコマーケット」です。メンバーや他チームのボランティアスタッフ、サポーターの皆さまから提供いただいた寄付品をトランクなどに詰めて持ち込み、来場者の方々とのお話を楽しみつつ、販売を行いました。



エコマーケットで来場者の方とお話しつつ販売するメンバー

2017 年度のメンバーは全員 3 月末で大学を卒業したため、PEACE チームとしての活動は一旦、活動休止となりました。

ピナツボ支援チーム（PEACE） は、フィリピン・パンパンガ州ボーラック町ミトラにある、ピナツボ火山被災地を支援しています。1991 年の火山噴火とその後の土石流で大きな被害を受け、被災後 16 年もの間、小学校すらなかった地域で、学校・幼稚園建設、給食の提供、社会教育セミナーの開催などを行っています。PEACE チームはそうした活動を支える資金を、楽しみながら工夫して集めています。

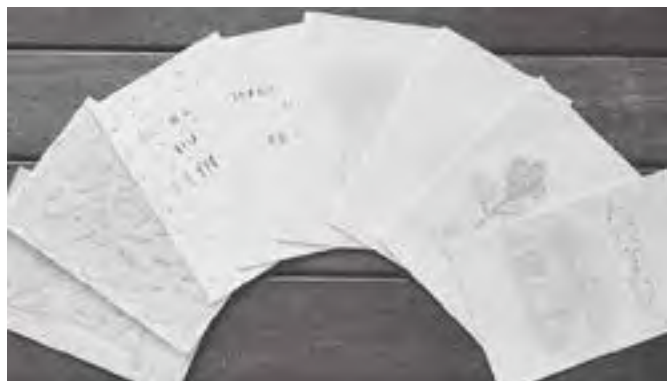
ペレーズ支援チーム FACT／翻訳チーム Volunteers for translation

2017 年度、アクセスは 2 地区 212 人の子どもたちに奨学金プログラムを提供し、小学校就学をサポートしました。この奨学生の子どもたちと、日本のサポーターの間では、メッセージカードなどのやりとりが行われています。1 年間でやりとりされる書類の数は、1000 点以上。ペレーズ支援チーム (FACT) の学生スタッフと、翻訳チームの社会人スタッフが分担し、翻訳に取り組みました。

毎年 5 月と 11 月には、大量のカードや報告書が届きます。誰の何が届いているかを確認することや、在宅ボランティアの方々が翻訳してくださった書類を確認し、間違いのないよう封筒に入れていく作業は、FACT と翻訳チームの皆さんがいなければとてもやりきることができなかったでしょう。子どもたちとサポーターの皆さんの間をつなぐ細かな事務作業は、FACT と翻訳チームのメンバーによって支えられています。

学生主体であるペレーズ支援チーム FACT は、翻訳とそれに付随する事務作業だけでなく、サポーターの方々にペレーズの現状や子どもたちの暮らしを伝えるニュースレターの発行にも取り組みました。少ないメンバー数ではありましたが、フィリピンを訪問した時の経験を思い出しながら話し合いを重ね、

サポーターの方々の気持ちを想像しながら記事を執筆しました。そうして発行したニュースレターの記事の中でも、特に評判が高かったのは、奨学生に手紙を書く際に使えるタガログ語フレーズ集でした。早速、それらのフレーズを使ってお手紙を書いてくださった方も少なからずおり、子どもたちとサポーターの皆さんの間の交流にわずかながら力になれたのではないかと思います。



子どもたちからサポーターの皆さんあてに届いたカードの一部

カフェイベント実行委員会

スタッフのライフストーリーに沿って フィリピンの現状とアクセスの活動を伝える

2014 年度に立ち上げたカフェイベント実行委員会は、事務局スタッフ、ボランティアスタッフ、インターンが参加し、「リラックスした雰囲気の中で国際協力について学び、考え、行動につなげるイベント」を企画・運営してきました。

2017 年度は、アクセスの中心メンバーのライフストーリーを通じて、フィリピンの現状やアクセスの活動を知っていただくトークライブを 3 回実施しました。

1 年間で、39 名の方々が参加

6 月には、前年度から実施してきた「フィリピンの子どもと NGO アクセス〜36 才女性事務局長の奮闘ストーリー〜」を京都で開催。その後、理事・杉山のライフストーリー「ダメ学生が国際ボランティアをする先生になるまで」を企画し、7 月と 11 月に、それぞれ京都と大阪で開催しました。

前年度までに比べると、開催回数・参加者数ともに伸び悩ん



フィリピンで出会った人々の忘れられない表情などについて、具体的に語った杉山理事

だ年ではありましたが、ボランティアスタッフの経験値が上がり、イベントの質が高くなったため、参加者の方々にはご満足いただけたように思います。

「ずっと、『私に何が出来るんだろう』と考えてきましたが、支援でなくとも、目の前の一つ一つのことに向き合うことが大切だと感じ、心が軽くなりました。」「杉山さんが現地の人から言われた言葉が、ぐっときました。」といった感想をいただきました。

メディア掲載

2017 年度は、新聞で 2 回取り上げていただき、35 件のお問い合わせがありました。

京都新聞 2017 年 5 月 28 日



あなたの食事が、フィリピンへのサポートに。

打ち上げ、忘年会、クリスマスパーティなどを、ちょこっとチャリティにできる 2 つのしくみ！



テーブルクロス

外食をする時、アプリ「テーブルクロス」から予約をすると、予約した人数分の給食が途上国の子どもたちへ届けられます。



Gochiso

登録されたレストランでの食事後、レシートをアップロードするとポイントが溜まり、次回のお食事代金として使ったり、気に入った NPO に寄付することができます。

2017 年度は、テーブルクロスを通じて 331,110 円、Gochiso を通じて 8,648 円のご寄付をいただきました。

アプリ「テーブルクロス」をアクセスのウェブサイトからダウンロードいただくと、ご寄付はフィリピンの子どもたちに届けられます。

子どもたちの声、サポーターの声



ジョリーくん
6年生／15才
ペレーズ在住

ついに、小学校を卒業できました！

僕はもうTさんの奨学生ではなくなりますが、それでもいつかお会いで来たらと願っています。これまでのご支援、本当にありがとうございました。あなたのおかげで、僕は小学校を卒業できました。その日を、あなたも喜んでくれたらうれしいです。あなたへの贈り物を用意できなくてごめんなさい。でも、あなたが僕のためにしてくれたことの代わりに、僕はもっとたくさん勉強します。



リザ・メルカド
アクセス
ペレーズ地区
奨学金プログラム担当

無力さを感じることもあるけれど…

子どもたちの中には、友達からのいじめや、先生からの暴力・暴言のために、学校に行けなくなるケースがあります。学校を休んで漁に出たり、魚や食べものを売り歩いて働き、家計を支える子どもたちもいます。そうした子どもたちを前にした時、私は自分の無力さを感じ、悲しくなることがあります。それでも私は、家庭訪問をしたり、子どもたちと話し合う場をもつことで、学校に通い続けるよう励ましています。



宮川 直子さん
奨学金サポーター

今ここにある幸せに気づかされた手紙

サポートしている奨学生の女の子とその母親から、お手紙と一年の成長の記録が送られてきました。恥ずかしがり屋の彼女がこの一年で積極的に物事に取り組めるようになったこと、将来は学校の先生になりたいこと…。彼女の成長を見守れる、心と心がつながる支援ができていたことがとてもうれしかったです。「私たちは貧しいけれど、幸せです。一緒に食事をし、一緒に寝て、一緒に暮らしている。それが幸せなのです。」という母親の手紙から、今ここにある幸せに気づかされました。



磯尾 悠真さん
マンスリー
サポーター

スタディツアーでの経験を忘れないために

スタディツアーの経験を少しでも忘れないために、今自分にできることを微力ながら協力させていただいています。マンスリーサポーターは、毎月活動に関わっているのが感じられるので嬉しく思っています。これからも、「今の自分にできること」に積極的に参加させてもらいたいです！

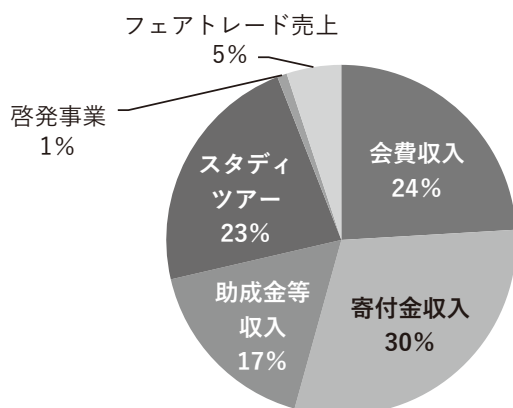
2017年度決算報告

活動計算書 自2017年4月1日 至2018年3月31日

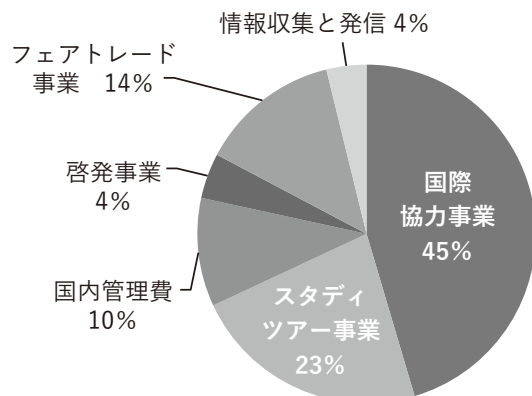
[税込] (単位：円)

科目	金額		
I 経常収益			
1. 会費収入			
正会員会費	505,000		
アクセス・サポーター会費	1,651,000		
奨学金サポーター会費	3,354,142		
マンスリーサポーター会費	211,000	5,721,142	
2. 寄付金収入			
事業指定寄付金	4,132,004		
一般寄付金(事業指定外)	3,058,205	7,190,209	
3. 助成金等収入			
受取助成金	4,057,000	4,057,000	
4. 事業収入			
フェアトレード事業	1,192,405		
スタディツアー事業	5,386,923		
カフェイベント事業	35,800		
啓発事業(講師派遣・原稿執筆)	212,889		
その他事業収益	330,891	7,158,908	
5. その他収入			
受取 利息	48		
雑 収 益	10,000	10,048	
経常収益 計			24,137,307
II 経常費用			
1. 事業費			
海外事業	10,902,769		
スタディツアー	5,434,043		
国内事業	5,380,759	21,717,571	
2. 管理費	2,489,094	2,489,094	
経常費用 計			24,206,665
III 当期経常増減額			△ 69,358
IV 経常外収益			
事務所移転補償金		800,000	
旧事務所債務免除益		87,000	
経常外収益 計			887,000
V 経常外費用			
事務所移転引越代		331,756	
経常外費用 計			331,756
VI 当期経常外増減額			555,244
税引前当期正味財産増減額			485,886
法人税、住民税及び事業税			70,000
当期正味財産増減額			415,886
前期繰越正味財産額			5,973,224
次期繰越正味財産額			6,389,110

収入内訳



支出内訳



2017年度決算報告

貸借対照表 2018年3月31日現在

(単位：円)

資産の部		負債・正味財産の部	
科目	金額	科目	金額
【流動資産】		負債の部	
(現金・預金)		【流動負債】	
現金	214,937	未払金	641,446
普通預金	6,927,849	前受金	1,896,072
現金・預金計	7,142,786	預り金	24,480
(売上債権)		仮受金	20,000
売掛金	44,058	未払法人税等	70,000
未収金	220,000	流動負債計	2,651,998
売上債権計	264,058	負債の部合計	2,651,998
(棚卸資産)		正味財産の部	
棚卸資産	1,257,763	【正味財産】	
貯蔵品	54,648	前期繰越正味財産額	5,973,224
棚卸資産計	1,312,411	当期正味財産増減額	415,886
(その他流動資産)		正味財産計	6,389,110
前渡金	221,852	正味財産の部合計	6,389,110
その他流動資産計	221,852		
流動資産合計	8,941,107		
【固定資産】			
(有形固定資産)			
什器備品	1		
有形固定資産計	1		
(投資その他の資産)			
保証金	100,000		
投資その他の資産計	100,000		
固定資産合計	100,001		
資産の部合計	9,041,108	負債・正味財産合計	9,041,108

監査報告書

監査報告書

特定非営利活動法人アタセス
-共生社会をめざす地球市民の会
理事長 新聞 純也 殿

平成30年 6月1日
監事 渡邊 功

私は、平成29年度（平成29年度4月1日から平成30年度3月31日まで）における特定非営利活動法人アタセス-共生社会をめざす地球市民の会の業務及び財産の状況について監査を行いました。

その結果、業務については、不正の行為又は法令若しくは定款に違反する重大な事実はないことが認められました。また、財産の状況については、NPO法人会計基準に準拠して、財務諸表等が適正に表示されているものと認められました。

以上、報告します。

私たちのめざすもの 「誰も犠牲にしない豊かな社会」



■痛みを和らげながら、原因にも目を向ける

アクセスのミッション（使命）は、3つです。

1つ目は、貧しい人々が今まさに直面している貧困の痛みを和らげようとする活動（教育、生計支援）です。2つ目は、貧困の原因を明らかにしながら、貧困をなくそうとする人々を増やすことです。3つ目は、それら2つを実践し、よりよい社会を創っていく力を、日本人・フィリピン人ともに身につけてもらうために、協力できる場を提供することです。どれか1つ欠けても、貧困をなくすことはできないと考えています。

■国境を越えて思いやりあう関係を築く

アクセスの奨学金プログラムは、週 300 円（年間 15000 円）で一人の子どもを小学校に通えるようにする、教育里親制度です。奨学金を受給したとしても、その家族がすぐに貧困から抜け出せるわけではありません。しかし、食事さえ満足に準備できないような時であっても、「日本で応援してくれている人がいるんだから、何とか頑張らないと」と感じる人は多く、支援者の存在が心の支えとなっています。もう一方で、日本の奨学金サポーターの中には、「フィリピンの子どもたちから届く手紙が励みになり、辛い仕事も頑張れます。」とおっしゃる方もいます。単なる経済援助ではなく、「国境を越えて思いやりあう関係を築くこと」ができれば思いながら、プログラムを実施しています。

貧困の中で生きるとは、問題が押し寄せる毎日を生き延びるということです。私たち NGO にそれら全ての問題を解決することはできませんし、問題を解決していくのは問題の中で生きる人々自身です。そんな中、「希望を持ち、前を向いて生きていこう」と思えるよう支援するのが、私たち NGO の役割だと考えます。

■ペレーズの漁獲量減少と日本

アクセスの事業地の1つであるペレーズ地区の漁師は言いま

す。「20年前は数時間で何キロも魚がとれた。でも今は8時間漁を続けてもせいぜい2〜3キロだ。」ペレーズ近辺の漁獲量減少の最大の原因は、日本、中国、台湾、韓国などから来る大型漁船による乱獲と言われています。実は私たちは、知らず知らずのうちにフィリピン近海でとれた魚を、日本で口にしているのです。

「より便利で、より安く、より質の高い暮らし」を求める日本のライフスタイルは、見えないところで、ほかの国の人々の生活に影響を与えています。こうした日本のライフスタイルを見直し、どうすれば「誰もが人間らしく幸せに暮らせる世界」、「見えないどこかで誰かを犠牲にしない世界」を創れるのか、考えていく必要があるのではないのでしょうか。

■「誰も犠牲にしない豊かな社会」をめざして

日本は中流層の多い経済大国から、格差社会に転落しようとしています。貧困問題は南の国の問題だけではありません、日本でも子どもの貧困・女性の貧困の問題が深刻化しています。そうした中で、世界の見えない誰かを犠牲にすることなく、例えば私たちが直接かかわっているフィリピンの貧しい人々とともに、より多くの人が幸せを感じられるような社会や世界のあり方について議論し、実践していくことがますます必要になっています。

原始時代のような暮らしに後戻りするのではなく、しかし便利さや物質的な豊かさばかりを追い求めるのでもない。個人の多様な価値観を尊重しながらも困った時は助け合えるような、新しい形の「豊かな社会」「豊かな世界」が必要になっているのではないのでしょうか。

アクセスは、経済的な貧しさを克服しながら、新しい形の「豊かな社会」を築こうとする人々が出会い、協力できるような場でありたいと考えています。そうした協力が国境を越えて広がり、希望を持って生きられる人が一人でも増えるように、皆さまとともに活動を創っていききたいと思います。

私たちのめざすもの 「私たちの活動の柱」

活動の柱1

エンパワメントという考え方

なかまと出会い、協力し、力をつけ、
ともに課題を解決する

私たちは、貧困問題を解決する主体は、貧困の中で生きる住民自身だと考えています。その上で、住民自身が自らを組織し、協力して自分たちの抱える問題を解決する力を身につけること（エンパワメント）を支援することが、NGOの主要な役割だと考えているのです。

具体的には、教育支援、生計支援、青年育成などのプログラムを通じて生活改善をすすめながら、プログラム参加者の組織づくりを行い、活動の一部または全部を住民自身の手で運営できるようになることをめざしています。また、各地域の貧しい人々が抱える問題（都市貧困コミュニティであれば強制立ち退きの問題、農村であれば大土地所有制の問題など）にも取り組むことのできる、地域全体をカバーする住民自身によって構成された住民協議会の建設もめざしています。

一人ひとりの人間が持つ力は小さくても、得意分野を活かし、支えあい、学びあい、協力する場となる組織があれば、貧困に立ち向かうための大きな力を生みだせる。そう信じて、組織づくりを通じたエンパワメントを大切にしています。

私たちが創ろうとする住民組織とは

私たちが最貧層の人々と共に創り出そうとしている、貧しい人々自身の組織(People's Organization=PO)は、次のような力を持つ組織です。

1. 民主主義を実践する力
2. 事業を運営する力
3. コミュニティ内のより貧しく、より抑圧されている人々を優先することのできる力
4. コミュニティの内外を問わず、人権・戦争(支配者による暴力的支配)という諸問題に取り組むことのできる力
5. 他のコミュニティ・他の地域・他の国の民衆の貧困・人権・戦争(支配者による暴力的支配)への取り組みに開かれ、連帯することのできる力
6. 地方や中央政府と交渉し、場合によっては闘うことのできる力

他方、「北」（先進国）の市民のエンパワメントも、NGOの重要な役割だと考えています。「南」（発展途上国）の貧困問題は、16世紀以降の近代植民地支配に始まる「北」による「南」の支配と搾取の結果です。この地球にある限られた資源や土地を、より多く手に入れることができる、またはより多く利用できる国や人々だけが豊かになり、それらを奪われたり自由に利用できない国や人々は貧しさを強いられます。貧困問題を解決するには、そうしたアンフェアな世界の仕組みを変えていく必要があります。

そして、そうした世界の仕組みを変えていくためには、「南」の貧しい人々の努力だけでなく、「北」の市民の自覚と参加が不可欠です。経済的に豊かでも、社会を変える力をまだ十分に持たない私たち「北」

の市民が協力できるネットワークを創り、議論と実践の場を提供することでエンパワメントする。それもまた、NGOの任務だと考えます。

アクセス日本のボランティア活動の促進に重点を置いた活動は、まさにその実践です。アクセスの目的に沿いつつも、それぞれ異なるテーマや課題を掲げたチームが組織され、独自の会議と活動を持って、自分たちで決めたことを自分たちで実行しています。現在、6つの支援チーム・事業部・支部が活動を継続しており、チームメンバーとして登録されているボランティアスタッフの数は約40名です。

私たちにとってボランティアスタッフとともに進める活動は、日本の市民のエンパワメントの一つの形であり、それ自身が私たちの会の目的となっています。そして、ボランティアスタッフ自身がさらに多くの人々に働きかけ、エンパワメントを進めているのです。

活動の柱2

地球市民という考え方

「日本人」「フィリピン人」という区別を越えて
「地球市民」として考え、行動する人を増やす

貧困問題に取り組むとき、『南』の問題は『南』の人々が解決するのであり、『北』の人々はそれを外部から支援するだけである」という考え方があります。しかし私たちは、たとえ「南」の地域で発生している問題であっても、「北」の市民も「地球市民」として「南」の市民と同じように問題に主体的に取り組むことができるし、取り組むべきであるという考え方をしています。

1980年代以降、グローバリゼーションが急速に進展・深化し、多国籍企業化による資本の「北」から「南」への移動と、移民・出稼ぎ労働者の「南」から「北」への移動が歴史的規模で進行しています。1990年代以降の日本のNGO活動の発展も、こうした文脈の中にあります。そうした中で、「南」と「北」の市民同士の、政府や企業を媒介としない直接的なつながりが、国境を越えて質・量共に発展しています。日本の社会や政府の問題は日本人の問題、と済ませてしまうことのできない状況が生まれつつあるのです。フィリピンの社会や政府の問題も同様です。

こうした社会背景のもと、アクセスはスタディーツアーをエンパワメントと地球市民形成のための重要な場としてとらえ、力を入れて取り組んできました。また、支援チーム・事業部も、年に1〜2度フィリピンのプロジェクト地を訪れ、支援している住民との交流や担当スタッフとの会議を直接行ってきました。アクセスの組織自身も、形式的には日比それぞれの国家の法律に基づきそれぞれの国に法人を組織していますが、実質的には単一の国際NGOとして活動を行っています。

こうして、私たちは「南」と「北」で市民のエンパワメントを進めながら、国境や国籍を超えて同じ目的を共有する「地球市民」という意識でたくさんの人々をつなげ、市民同士の直接の協働関係を築くことを通じて、貧困問題を解決しようとしています。

私たちのめざすもの 「エンパワメントと組織化」

「エンパワメント」とは、アクセスが貧しい人々の支援をする際、もっとも重視している考え方です。
エンパワメントには様々な定義がありますが、簡単に言えば、
「人々の持つ潜在能力をひきだし、自ら問題を解決できるような力をつけること」と言えます。

自立支援としてのエンパワメント

貧しい人々の生活状態をよくしたいと思ったとき、支援の仕方にはさまざまな方法があります。1つは、食事を提供したり、着るものを提供したり…今まさに足りていないものを、現物で提供するという支援です。これは短時間ででき、成果もわかりやすい。けれども、多くの貧しい人々は「援助をもらうより、自ら働いて生活を良くしたい」と願っているのが現実です。

そこで多くのNGOが行っているのが、「問題を解決する手段を教える」という支援です。貧しい農民には、より収穫を得られるような農法を教える。子どもたちには、将来、安定した仕事につきやすくするために、教育の機会を提供する。働きたくても仕事が見つからない人には、商品として売れる品物を作る技術を身につけてもらえるよう訓練する。こうして、それぞれの人が直面している課題について、その課題を解決するための力を身につけられるような支援(エンパワメント)を行うのです。アクセスのプログラムのほとんどが、これに当てはまります。しかし、アクセスはそれだけで終わりにたくないと考えています。

「協力する力をつける」エンパワメント

ある子どもを大学進学まで支援し、卒業後に一流企業に就職できたしましょう。その子は家族のために立派な家を建て、携帯電話やコンピュータを買って、不自由ない生活を実現することができるよう。でも、その子が他の貧しい家族については気にかけないとしたら…？

フィリピンでは、家族・親戚間での助け合いはとても大切にされていますが、血縁関係にない人々同士が助け合ったり、みんなで協力して問題を解決しようとする姿勢はそれほど強くありません。むしろ、貧しさから抜け出そうと、「家族や親戚のために、他を蹴落としてでも自分はチャンスを掴まなければ」と努力する人が多いといえるかもしれません。

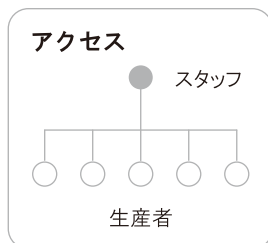
そんな社会の中で、同じ苦勞を抱える人々同士が、力をあわせて共通の課題に立ち向かっていけるようにしていきたい、というのがアクセスの考えです。たとえば奨学金プログラムでは、子どもたちに教育の機会を提供すると同時に、保護者会を組織しています。保護者会では、子どもたちの多くがお腹をすかせたまま授業を受けているという現状をなんとかしようと、保護者が交代で給食を調理し、届けるという活動を始めました。個人では解決できない問題について、共通の課題を抱えた保護者が自らを組織し、協力し合い、問題解決のための取り組みを皆で実施し、継続できるようにしていく。アクセスは、そうした活動に必要な資金を調達し、その事業の運営・組織の運営にあたって必要なさまざまなスキルを保護者が身につけられるよう、サポートをしています。アクセスでは、こうした集団に対するエンパワメントに力を入れています。

もう1つ、アクセスがめざしているのは、貧しい人々に地域ぐるみで問題を解決しようとする力を身につけてもらおう、ということです。教育や仕事、青少年育成など、特定の分野ごとの事業運営と並行して、地域全体が抱える課題(大土地所有制や、立ち退きの問題など)に取り組める組織をつくることをめざし、活動を行っています。

フェアトレードプログラムの場合

ベレーズ地区で、地域に豊富にある素材(ココナツ殻など)を活用した商品の生産・販売を行い、そこから得られる収入で生産者の生活を向上させていこうという取り組みです。

2000年スタート当初



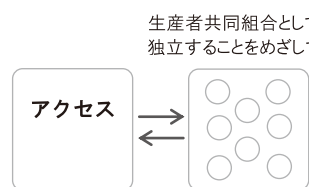
働きたいと願う女性を対象に、技術指導を行い、商品生産を開始。日比共同でデザインを開発し、主に日本で販売。一人ひとりの生産者が、アクセスのスタッフから直接、指導や注文を受けていました。

2012年度



生産者グループを組織。以前はアクセスのスタッフが行っていた発注の配分、品質管理、出荷準備などもメンバーで分担して行うようになっています。アクセス・スタッフは、生産者団体が自立できるよう、スキル研修などのサポートを行っています。

将来的には…

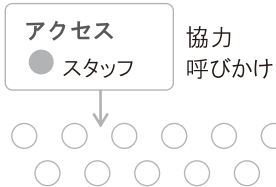


生産者一人ひとりが対等な立場で経営・運営にたずさわり、民主的なものごとを決定する共同組合として、生産者団体が自立することを目指しています。アクセスは、取引先・相談役として関係を継続します。

給食プログラムの場合

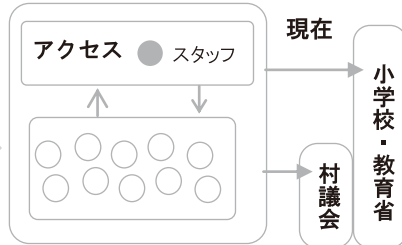
ピナツボ地区の子どもたちのための給食プログラムでは、アクセスが資金を確保し、保護者が買出し、調理、配膳、後片付けを担っています。

2010年スタート



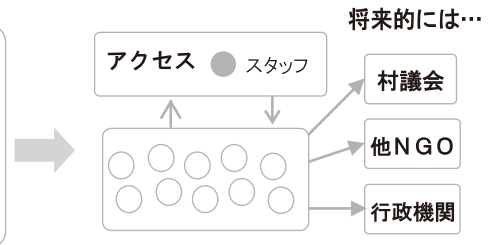
保護者に呼びかけ、「保護者会」を組織

近畿ろうきんからの支援で給食プログラムを実施するにあたり、幼稚園・小学校の保護者を「保護者会」として組織。保護者が協力して、給食を実施する体制を作りました。



保護者会／定期ミーティング

給食準備ミーティングや、調理ボランティアは、保護者間の親睦を深める場に。「小学校卒業まで学べる地域をつくりたい」という保護者の想いが届き、教育省が2014年に校舎を増設。2014年度は6年生まで開講され、火山被災後、初の卒業生11人が誕生しました！



保護者会／定期ミーティング

将来的には…地域の未来は、住民自身が考え、決めていきます。アクセスは話し合いをサポートし、意見がまとまるよう支援します。人々が村議会やNGO、行政などと協力して課題を解決していけるようになることをめざします。

貧しい生活の中で、十分な教育を受けることができずにきた人々にとって、事業を運営したり、組織として話し合いでものごとを決めたり問題を解決したりするのは簡単なことではありません。そんな中、アクセスでは保護者会や生産者団体といった、プログラム参加者によるグループを組織し、日々の活動を通じて、メンバーが事業運営に関するさまざまなスキルを身につけられるようにしています。

アクセス・スタッフの仕事は、そうした事業運営をまずは自らやることで手本を示し、その後、徐々にその仕事を参加者に引き継いでいくこと、そして組織運営に関するアドバイスをしたり、相談にのったりすることです。また、子どもや女性の権利についてのセミナーを行ったり、貧困が生まれる構造についての学習会を行うなどして、住民の意識の向上にも取り組んでいます。

コミュニティ・エンパワメント～地域の問題にとりくむ組織づくり

現在、アクセスが行っているすべてのプログラムのもとで、住民のグループを組織すること、そしてそれぞれのプログラムを組織のメンバー自身が運営できるようになることをめざしています。いずれは、それぞれの組織の代表者によって「住民協議会」がつくれ、地域の多くの人たちが共通して抱えている問題の解決にとりくめるような存在になっていけば、と考えています。

住民協議会の建設と役割

将来的には…

アクセス
アクセスの役割は、住民協議会が取り組む課題について、活動の参考になる情報・人脈などあらゆるリソースを提供したり、活動の相談にのったりすることです。

【ペレーズ地区住民協議会】

マパヤパ生産者共同組合

青年会

保護者会

奨学生会

マイクロファイナンス・グループ

土地問題

環境問題

女性の権利

子どもの権利

農村地区の貧困の原因の1つは、大土地所有制ですが、一部の農民が不満を口にしたいくらいでは大土地所有制をなくすことはできません。でも、土地なし農民が協力し、一斉に声を挙げれば、状況を改善できる可能性はあります。

子どもの権利についても、尊重されるべき権利について知る人を増やし、多くの子どもが団結して権利を主張すれば、権利侵害は減っていきます。

「住民協議会」は、地域が抱える問題について提起し、どうすれば問題が解決できるのかを考え、議論し、行動にうつしていくための場です。

役員・スタッフ・ボランティア

フィリピン理事会

理事長	カルメンシータ・カラグタグ（メンチ）	副理事長	リコ・ポンス
理事	リカ・デラ・クルス	理事	ロサリナ・クラマー（リサ）
理事	石川 雅国		

フィリピン事務局



事務局長
ロサリナ・クラマー
（リサ）



総務経理
ピナツボ地区コーディネーター
石川 雅国



都市貧困地区担当
クリスター・ジョン・ララ
（ジェリック）



教育啓発担当
アレン・アルゾラ



フェアトレード
マーケティング担当
ジセル・フェルナンデス

ピナツボ地区



アシスタント・コーディネーター
ジェネット・アルバロ



幼稚園教員
アイリーン・ブラヤグ



事務所管理人
ダニーロ・ドティリョス

都市貧困地区



幼稚園管理人
マリテス・ベリノ



幼稚園教員
マーリン・バデシオ



教員補助
テレサ・オングダ



青年会担当
ジェセル・エヴァスコ



奨学金担当
ジェイミー・アマンテ

ペレーズ地区



コーディネーター
ラニー・トルダ（ランス）



フェアトレード担当
アビゲル・エスカミリヤス
（アビー）



奨学金担当
リザ・メルカド



奨学金担当
ジェンナ・リン・オスタガ（ジェン）



奨学金担当
ライカ・フェブラー



（2018年11月時点）

アクセス日本

日本理事会

理事長	新開 純也	元株式会社タカラブネ社長	理事	崎山 政毅	立命館大学教授
常務理事	森脇 祐一	事務局員	理事	白坂 有子	株式会社エコー代表取締役社長
理事	位田 浩	弁護士	理事	杉山 遼	特別支援学校 教員
		認定 NPO 法人大阪精神医療人権センター代表	理事	田中 雅規	株式会社高島屋社員
理事	江口 慶明	関西大学生生活協同組合専務理事	理事	中本 式子	元生活クラブ京都エルコープ理事長
理事	河西 実	NPO 法人フェア・プラス事務局長	理事	野田 沙良	事務局長
理事	片岡 卓三	医師	理事	廣瀬 昌代	キッズファーム in 大原代表
理事	菊池 光造	京都大学名誉教授	監事	渡邊 功	公認会計士

日本事務局



事務局長
野田 沙良



事務局員
森脇 祐一



事務局員
竹内 彩帆



事務局員
中村 智子



インターン
菊川 弥夢

(2018 年 11 月時点)

事業部・チーム・支部・委員会 ボランティア

【フェアトレード事業部 (FT 事業部)】

久保七彩、坂本唯、田中雅規、廣瀬昌代

【開発教育チーム (GET)】

松崎智子、藤井愛華、平井さくら、岡崎沙夜、木下七美

【スモーキーマウンテン支援チーム (FIT)】

吉永綾子、杉山遼、伊藤恭平、尾崎弘明、加美夏生、
小長谷結花、寺脇優衣、服部莉央、藤田直也

【ベレーズ支援チーム (FACT)】

天野空、木原茉莉亜

【東京支部】

中川淳一郎、藤田直也、白柳飛翔、山下智大、中村衣里、
堀内美樹、海老澤美幸

【翻訳ボランティアチーム】

平井孝子、榎本桂子、岡崎眞也、木村龍一

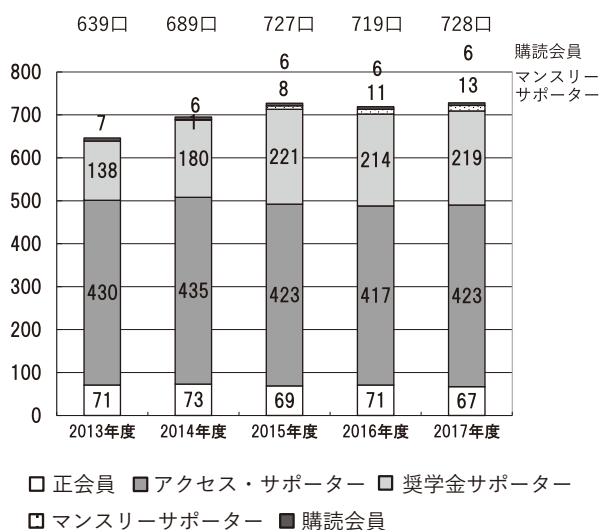
(2018 年 9 月時点)

Japan

会員・寄付者（2017 年度）

会員サポーター数	全 728 口
寄付協力（資金）	個人 80 名、 グループ・学校・法人等 31 件
書き損じはがき	個人・グループ・学校・法人等 81 件／2,611 枚
ココロ便	個人・グループ・法人等 97 件／126,306 円 (本・CD・DVD・ゲームのご寄付)
その他物資	個人・学校・法人等 81 件 (文具・日用品・食品・衣類・ 未使用テレホンカード・金券・ 切手など)

※各年度末時点の会員サポーター口数



ご支援いただいた助成団体（2017 年度以降）

日本労働組合総連合会（連合）「愛のカンパ」

フィリピンゴミ捨て場周辺コミュニティにおける教育支援（2017 年度、2018 年度）

一般財団法人まちづくり地球市民財団

フィリピン貧農村地区におけるフェアトレードプログラム強化事業（2017 年度）

公益財団法人大阪コミュニティ財団「ストリートチルドレン等救済基金」

フィリピン・ピナツボ火山土石流被災地での子どもに優しいコミュニティ建設（2017 年度）

真如苑・関西 NGO 協議会「関西地域 NGO 助成プログラム」

インターネット広報の戦略的強化を通じた団体基盤強化事業（2017 年度）

公益信託 今井記念海外協力基金「国際協力 NGO 助成」

奨学金プログラムの保護者・奨学生に対するジェンダー・センシティビティについての意識向上事業（2017 年度）



まちづくり地球市民財団の助成金で、事業の強化に取り組んできたフェアトレード事業。クリスマスカードを作る生産者。



日本労働組合総連合会から助成いただいたバヤタス地区の幼稚園



大阪コミュニティ財団から助成いただいた、子どもの権利セミナーの様子

ご協力いただいた企業・学校・団体等（2017 年度）

京都市立修学院中学校	フィリピンの子どもたちの小学校就学に対する支援（2002 年～）
近畿労働金庫	フィリピンの子どもたちに教育と給食を提供する「心のそしな」プロジェクト（2010 年～）
ブックオフコーポレーション株式会社	中古品の寄付によりフィリピンを支援する「ココロ便」プロジェクト（2013 年～）
株式会社ドロキア・オラシタ	フィリピンの子どもたちへの給食と文房具を提供、小学校就学を支援（2014 年～）
gooddo 株式会社	NPO を無料で簡単に支援できる! gooddo（2015 ～ 2017 年）
株式会社テーブルクロス	社会貢献型グルメアプリ「テーブルクロス」 あなたの予約が子どもの給食に（2014 年～）
株式会社 LIFULL	フィリピンの子若者育成ワークショップ支援／社員向けスタディツアーの実施（2017 年）

スリースター京都、薬院オーガニック株式会社、株式会社ロジック、株式会社マナプラス、Gochiso 株式会社、一般財団法人 H2O サンタ、認定 NPO 法人 DxP、特定非営利活動法人アユス仏教国際協力ネットワーク、喫茶うずら、有限会社ウエストコースト、ゲストハウスたむら、日本キリスト教団 鴨東協会、西正寺、浄土真宗本願寺派北豊教区門司組、ランチフォースファウンデーション、豊中市立第八中学校、木津川市立木津第二中学校、門真市立第三中学校、立命館中学校・高等学校、豊中市立第八中学校、神戸学院大学ボランティア活動支援室、京都市伏見青少年活動センター、国際ソロプチミスト稲城、神戸ゾンタクラブ、京都西北ローターアクトクラブ、京都北ローターアクトクラブ、かみひとねっとわーく京都、京都市南病院有志の皆さま、札幌チャリティコンサート来場者の皆さま、龍谷大学斎藤ゼミの皆さま、きょういく基地の皆さま（順不同）

受賞歴

■ 公益財団法人かめのり財団「第 5 回かめのり賞」（2011 年）

■ 特定非営利活動法人パートナーシップ・サポートセンター
第 8 回パートナーシップ大賞グランプリ（2011 年）

■ 社会福祉法人京都市社会福祉協議会表彰（2013 年）

■ 公益財団法人京都オムロン地域協力基金
「ヒューマンかざぐるま賞」（2017 年）

■ 公益財団法人社会貢献支援財団「社会貢献者表彰」（2017 年）



社会貢献支援財団の理事長、
安倍昭恵さんとともに

加盟団体・ネットワーク等（2017 年度）

特定非営利活動法人関西 NGO 協議会（正会員）、特定非営利活動法人国際協力 NGO センター（正会員）

日比 NGO ネットワーク（正会員、運営委員）、京都府国際交流団体情報ネットワーク「kokoka 国際交流団体ねっと」（会員）

預金を通じて、子どもたちを応援！「心のそしな」

アクセスでは近畿ろうきんと連携して、ピナツボ地区とベレーズ地区の子どもたちに教育と給食を提供する「心のそしな」プロジェクトを 2010 年より 9 年間実施してきました。これは、近畿ろうきんに定期預金などをしてくださった方への粗品を一部なくし、粗品分の費用を子どもたちへの給食・教育支援にあてるというものです。この取り組みは、企業と NPO の協働事業を表彰する「パートナーシップ大賞」の 2011 年度グランプリにも選ばれました。





子 ど も に 教 育 、 女 性 に 仕 事 を

認定NPO法人 アクセスー共生社会をめざす地球市民の会

<https://access-jp.org>

612-0029 京都市伏見区深草西浦町8-85-4

TEL/FAX 075-643-7232 E-MAIL office@access-jp.org